

理論に基づいた第二言語習得研究：日本人英語学習者の言語能力の分析

Theory-based studies of second language acquisition: Analyses of linguistic knowledge of Japanese learners of English

司会・提案

若林茂則（群馬県立女子大学）

提案

須田孝司（大東文化大学）

伊藤美代子（大東文化大学）

新井佳織（群馬県立女子大学）

1. 目的

本シンポジウムの目的は3つある。1つ目は、第二言語習得（SLA）研究の目的とその手法について論じることである。ここでは、例えば、SLA 研究と呼ばれている研究の中には、実際には SLA の解明を研究の対象としていないものや、現在の研究でも 1970 年代以降明らかにされてきた事実を無視するような形で進められている研究があることを示す。また、基盤となる理論なしにデータを集めた結果、論理的な考察を行うことが不可能になってしまった研究があることなどにも触れながら、SLA 研究の目的とその手法について考えていきたい。2つ目は、日本人英語学習者の「英語の能力」について、実証的なデータに基づいて論じることである。英語の代名詞、数量詞、動詞の屈折などの習得について、結果として、当初の目的を達成せずに終わった研究なども紹介しながら、日本人英語学習者の「英語能力」について考えていきたい。3つ目は、日本人英語学習者の研究から、SLA という人間の認知活動一般に対して、どのような提案が行えるのか、また、それは何なのか、ということについて論じることである。ここでは、母語として持っている言語知識がすべて第二言語に反映されるのかどうか、SLA と母語習得の類似点と相違点は何か、第二言語学習者にとって特に難しいと思われる点は何か、などの問題を考えていきたい。

2. 構成

上記の目的に従って、このシンポジウムは3つのセクションで構成する。

2.1. 第二言語習得研究の目的とその手法（担当：若林茂則）

はじめに、SLA 研究の研究領域について、いくつかの観点から考える。まず、SLA 研究と外国語教育研究との違いについて論じた後、前者を Wakabayashi (2003) の考え方にしたがって core SLA research と broad SLA research に分け、さらに後者を2つの領域に分ける。それらの分類を通して、現在の SLA 研究と呼ばれている領域には、本来その領域に含まれるべきでない種類の研究も含まれているのではないかという問題提議を行いたい。

次に、議論の対象を core SLA research に絞り、これまでの研究で明らかにされてきたことを簡単に振り返る。対象分析仮説、創造構築仮説、母語習得との類似と相違、刺激の貧困の問題、系統性と変異性などを順に示した後、いわゆる文化変容モデルを取り上げ、その問題点を明らかにする。それによって、SLA 研究にとって、基盤となる「理論」が抜けるとどのような問題が生じるのかを明らかにしたい。

9月5日(金) シンポジウム1 第6室(541)

2.2. 日本人英語学習者の「英語の能力」 (担当: 須田孝司、伊藤美代子、新井佳織)

ここでは、主に生成文法理論に基づく SLA 研究を見ていく。ここでは、まず、英語代名詞の形の習得を取り上げる。日本文に対応する英文を選択するタスクを行った場合、日本人英語学習者の中には、Him kissed her や He likes she のような文を、正しい英文だと判断する学習者がいた。この判断結果から、代名詞の形の習得では、英語を母語として習得する子供と同じように習得が行われる場合と母語の文法が第二言語に反映される場合があることを示す。次に、代名詞の指示特性の習得を取り上げる。絵を使った truth value judgement task を行った結果、日本語と英語の代名詞の指示特性は異なっているにもかかわらず、学習者は子供の母語習得と全体的に似た傾向を示した。この結果をもとに、SLA における言語処理の問題や、SLA と熟達度の関係について議論する。最後に、数量詞遊離の習得を取り上げる。英語と日本語の数量詞は、共に修飾する名詞句から離れることができるが、遊離に関する規則は両言語で異なる。日本人大学生を対象にして文法性判断タスクを行った結果、学習者は英語の存在数量詞も普遍数量詞も遊離を許さないことがわかった。この結果より、学習者は普遍数量詞と存在数量詞の区別はできるが、決定辞句の構造が習得できないことを示す。

このように、生成文法理論に基づいて実証的データを扱っている SLA 研究を紹介し、日本人の「英語能力」について考えていきたい。

2.3. 第二言語習得モデル (担当: 若林茂則)

理論に基づいた SLA 研究では、様々な習得モデルが提案されている。例えば、生成文法理論を基盤とした SLA 研究では、母語として持っている言語知識がすべて第二言語に反映されると考える SLA モデル (Schwartz & Sprouse, 1996) や、これとは対照的に、母語の言語知識は第二言語に反映されず目標言語の母語習得と同じように習得が行われると考える SLA モデル (Vainikka & Young-Scholten, 1996) などがある。また、これらのモデル以外にも、言語機能と形式に焦点を当てた競合モデルや言語処理のプロセスに基づくコネクショニスト・モデルも存在する。

ここでは、上述のような日本人英語学習者の習得研究や他の SLA 研究をもとに、SLA のメカニズムはどのようになっていると考えられるか、SLA 研究に対しどのような提案ができるのか、残された問題点は何か、ということについて論じていきたい。

参考文献

- Schwartz, B. D. and Sprouse, R. A. (1996). "L2 cognitive states and the full transfer/full access model". *Second Language Research* 12, 40-72.
- Vainikka, A. and Young-Scholten, M. (1996). "Gradual development of L2 phrase structure". *Second Language Research* 12, 7-39.
- Wakabayashi, S. (2003). "Contributions of the study of Japanese as a second language to our general understanding of second language acquisition and the definition of second language acquisition research". *Second Language Research* 19, 1, 76-94.